【別添１】

28	神戸大学附属幼稚園　外1校	H29～R1

令和元年度研究開発実施報告書（要約）

１　研究開発課題

幼稚園と小学校の円滑な接続に資する，子どもの学びに着目した，幼児教育と小学校教育 9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の充実

２　研究の概要（別紙１）

幼稚園と小学校の円滑な接続を図るため，子どもの学びの姿から 3 歳から 11 歳までの 9 年間における「発達の節目」を明らかにし，9 年間を見通した教育課程の大綱となる「初等教育要領」を充実する。

具体的には，以下の取組を実施する。

①9 年間を見通した年間学習計画等の見直しの継続
②保育・授業による実践データの収集及び検証
③資質・能力ごとに示しためざす子どもの姿の空欄部分を明確化
④資質・能力の重なりがないか改めて検討し，資質・能力それぞれの関係性を明確化
⑤幼児教育と小学校教育の 9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の充実
⑥新設教科「グローバル科」（9～11 歳）の内容や 6～8 歳までのカリキュラムとのつながり，効果検証のあり方についての明確化
⑦「初等教育要領」の実践化，精緻化に向けた教師の学習の場の構築とその効果の検証

３　研究の目的と仮説等

（１）研究仮説

【現状の分析】

「幼稚園教育要領」（平成 20 年 3 月告示）及び「小学校学習指導要領」（平成 20 年 3 月告示）において，幼稚園と小学校の接続や連携の重要性が明記されている。

しかしながら，幼稚園と小学校の教師同士の交流による，幼小の9年間を一体としてとらえた上での，互いの教育内容及び指導方法等についての相互理解の深化や一貫性を持った教育課程の編成が十分になされているとは言えない状況にある。その原因の一つとして「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」の違いが挙げられると考える。

「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の在り方について（報告）（平成22年11月11日）」において，「幼稚園教育要領」と「小学校学習指導要領」の「構成原理における違い」について，「発達の段階に配慮した違いということができる」としながらも，「幼児期と児童期における教育課程の構成原理やそれに伴う指導方法等には，発達の段階の違いに起因する違いが存在するものの，こうした違いの理解・実践は，あくまで両者の教育の目的・目標が連続性・一貫性をもって構成されているとの前提に立って行われなければならない。」とされている。しかしながら，学校現場の現状としては，この「前提」が守られていないため，両者の違いは，「内容，時間の設定や指導方法等にも顕著な違いをもたらすこと」になってしまい，幼稚園と小学校の教師は連携や交流の重要性は理解しているものの，幼稚園と小学校は別物であるとの認識がぬぐいきれないでいると考えられる。また，「幼児期から児童期にかけての時期は，学びの芽生えから次第に自覚的な学びへと発展していく時期である。このため，幼児期から児童期にかけては，学びの芽生えと自覚的な学びの両者の調和のとれた教育を展開することが必要である。」とされていることから，幼小一体のカリキュラムの必要性を説かれていると言える。

新しい学習指導要領等においては，具体的な改善の方向性として，学習指導要領等の枠組みの見直しが図られ，各学校段階間の接続を重視した改善の方向性が示されている。幼児教育においては，「幼稚園教育において育まれた資質・能力を踏まえ，小学校教育が円滑に行われるよう，小学校の教師との意見交換や合同の研究の機会などを設け，『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』を共有するなど連携を図り，幼稚園教育と小学校教育との円滑な接続を図る」ことが示されている。また，小学校においては，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿を踏まえた指導を工夫することにより，幼稚園教育要領等に基づく幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえて教育活動を実施し，児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること」などが示されている。

本研究開発において，さらなる深化・充実を図ろうとしている「初等教育要領」では，「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」のみならず，3歳入園から5歳修了に至る過程も明らかにしている。また，「低学年，中学年，高

学年の発達段階に応じた資質・能力の在り方」にとどまらず，幼稚園から小学校までの9年間を貫いて，発揮，伸長を促す資質・能力とは何かを詳細に示し，さらには，詳細に示したそれぞれの資質・能力ごとに，実践を通した子どもの事実を根拠にしためざす子どもの姿を示すものである。

【研究の目的】

子どもの学びに着目し，学びの転換点をさぐりながら，幼小の「接続期」を含む3歳から11歳までの9年間における「発達の節目」を明らかにすることにより，子どもの育ちを保障するとともに，幼稚園と小学校の教師同士の相互理解を促進するため，9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」を充実する。

子どもの学びは本来連続しており，教師はその学びを支え，子どもの成長を導く立場にある。しかし，学校現場においては，「幼稚園の年長でできていたことが，小学校入学とともにできなくなる。」，「小学校入学時に教科学習に対応できるだけの十分な準備ができていない。」などといった声がしばしば聞かれる。これらは幼稚園と小学校の接続に課題があり，前述の通り，教師同士の共通理解が十分でないことから生じていると考える。そのため，幼稚園と小学校の9年間を一体とした教育課程の大綱となる「初等教育要領」を開発することにより，互いの教育内容及び指導方法等について教師同士の共通理解を深め，子どもの学びの連続性を保障することができると考えている。

以上，本研究開発において，幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続を図り，教師同士の共通理解を深めるとともに，子どもの学びの連続性を保障することは，我が国の初等教育全体の深化・発展に資することができると考える。

【研究開発の手段】

①保育・授業実践による実践データの収集及び検証

実践を通した子どもの事実を基に見直しをかけて作成した「初等教育要領」に基づく実践を行うことで実践データを収集するとともに，子どもの学びの実態に着目しながら，その妥当性を検証する。その際，常に子どもの事実にこだわり，子どもが何を学んだかを見取ることに主眼を置き，各教師個人による日々の省察，研究グループによる省察及び全体での省察を行う。

②教育課程の大綱「初等教育要領」の充実

実践による検討・修正を繰り返すことで，資質・能力のめざす姿の深化・充実を図り「初等教育要領」の完成度を高める。その際，確実に「初等教育要領」の充実を図れるよう，次に示すとおり，年次ごとに重点をかける箇所を明らかにして研究を推進する。

＜指定1年目＞

特に固有的資質・能力の空欄部分を明らかにすることに重点を置いて充実を図る。

＜指定2年目＞

特に固有的資質・能力のめざす姿を明らかにするとともに，各資質・能力が発揮，伸長される9年間のカリキュラムを作成する。

＜指定3年目＞

延長最終年度であることを踏まえ，延長第1年次及び第2年次の課題を解消することに重点を置いて充実を図る。

【期待される具体的成果】

本研究開発の指定延長によって，次のような成果が得られると考える。

① 本研究開発で開発した，9年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」を充実することができ，資質・能力ごとに，幼稚園から小学校までの9年間の発達の過程に応じためざす子どもの姿を明らかにできる。

② 幼稚園と小学校の教師同士の連携や交流が促進され，幼小の9年間を一体としてとらえた上での，互いの教育内容及び指導方法等についての相互理解の深化や一貫性を持った教育実践が推進される。

③ 「初等教育要領」に基づく実践を通して，幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続が図られ，子どもの学びの連続性を保障することができる。

研究発表会等を通して，子どもの学びに着目することや9年間を一体としてとらえることの重要性，それらに基づくカリキュラムや実践について，地域の初等教育関係者との相互理解を促進するとともに，保護者の理解を深めるなど，より一層の連携・協力を推進することができる。

（２）教育課程の特例

① 6歳，7歳前半（小学校第1学年，第2学年の前期）の教育において，「小学校学習指導要領」における教科等の内容を包含し，かつ，幼稚園での学びを活かし，初等教育要領の観点である54の資質・能力で編成した教育課程を実施する。

② 7歳後半（小学校第2学年後期）の教育において，「小学校学習指導要領」の「各教科等」に加え，英語に親

しむと共に，広く「せかい」のあり様に子ども達が触れ合うことを重視するため，「せかい領域」を新設した教育課程を実施する。

③　8 歳～11 歳（小学校第 3 学年～第 6 学年）の教育において，「小学校学習指導要領」の「各教科等」に加え，グローバル社会における共通コミュニケーション言語である英語を主とし，外国語と自国も含めた文化について，広く実践的に学んでいく教科としての「グローバル科」を新設した教育課程を実施する。「グローバル科」は，外国語科における内容を包含したものとして編成することとし，外国語活動は，第 3・4・5・6 学年の教育課程から割愛する。

４　研究内容

（１）教育課程の内容

以下の①～③の教育課程を実践するにあたり，9 年間を見通して育むべき「資質・能力」及び子どもの発達に応じた「めざす姿」の観点から「年間学習計画」等の改善・充実を図り，「初等教育要領」（案）の作成につなげる。

①初等前期にあたる 3 歳（幼稚園年少），4 歳（幼稚園年中），5 歳（幼稚園年長）においては，平成 30 年 4 月から実施される「幼稚園教育要領」における内容を包含した，初等教育要領の観点である 54 の資質・能力で編成した教育課程を実施する。

②①と同じく初等前期にあたる 6 歳（小学校第 1 学年），7 歳前半（小学校第 2 学年前期）では，「小学校学習指導要領」における内容を包含し，かつ，幼稚園での学びを活かし，54 の資質・能力で編成した教育課程を実施する。

③初等後期にあたる 7 歳後半（小学校第 2 学年後期）においては，「小学校学習指導要領」の「各教科等」に加え，英語に親しむと共に，広く「せかい」のあり様に子ども達が触れ合うことを重視するため，「せかい領域」を新設した教育課程を実施する。

④③同じく初等後期にあたる 8 歳（小学校第 3 学年），9 歳（小学校第 4 学年），10 歳（小学校第 5 学年），11 歳（小学校第 6 学年）においては，グローバル社会における共通コミュニケーション言語である英語を主とし，外国語と自国も含めた文化について，広く実践的に学んでいく教科としての「グローバル科」を新設した教育課程を実施する。「グローバル科」は，外国語活動における内容を包含したものとして編成することとし，外国語活動は第 3・4・5・6 学年の教育課程から割愛する。

（２）研究の経過

	実施内容等
第一年次	第 1 年次は，以下の体制で研究に取り組んだ。 ○　運営指導委員会：第 1 回を 6 月 22 日に，第 2 回を 1 月 31 日に実施 ○　拡大研究会 ・幼稚園教育課程における観点の見直し ・新設教科「グローバル科」の内容，系統性の明確化をはじめ，各教科の実践化に向けた教科部会のグループを組織 ○　幼小研究会：幼稚園及び小学校教員で構成し，以下のように組織 ・初等教育研究委員会：管理職及び研究担当教員で構成し，研究の方針決定やまとめを行う（16 回開催） ・初等教育研究会：全教員で構成し，研究の共通理解を図る（9 回開催） ・小学校部会：資質・能力が発揮，伸長される学びの場づくりの推進（38 回開催） ・幼稚園部会：資質・能力の発揮，伸長を支える保育実践の検討および実践事例の検討，カリキュラム・マネジメントの推進（49 回開催） これらの研究会を通して，以下のような成果が得られた。 **1.　「実践データ」の集積** **＜実践記録フォーマットによるデータの集積＞** 幼小ともに，子ども達が資質・能力を発揮，伸長している姿について事実と解釈を分けて見取り，記録できるよう，実践記録フォーマットを活用した。幼稚園においては，実践記録フォーマットに「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の 10 の項目との対応も示し，汎用的な活用に寄与するものとなるようにしている。また，実践記録を集積した後には，幼小の教員間で検討を行い，子どもの姿である事実を基に，資質・能力とそのめざす姿の妥当性を検証した。 **＜ドキュメンテーションによるデータの集積＞** 幼稚園においては，経験や学びの共有を目的として，ドキュメンテーションの活用による実践データの集積を行った。ドキュメンテーションによる実践データの集積は，主に保護者と子どもの経験や学びを共有することを目的としているため，遊びや生活のまとまりごとにドキュメンテーションを作成した。写真と共に教師が見取った子どもの姿，環境の構成や教師の援助とその意図，子どもの言葉を記載している。

	2. 固有的資質・能力の見直し 28 年度の課題としてもあげていた，「10 視点カリキュラム」と「初等教育要領」の一部整合がついていない部分の見直しを行うことに加えて，固有的資質・能力同士の重なりが見られたり，どの資質・能力にも当てはまらない学びがあったりするなどの課題に向けて，固有的資質・能力全てを再度見直した。その際，設定においては本校園において平成 12 年度～14 年度に幼稚園入園から中学校卒業までの 12 年間の子どもの学びの過程を整理して作成した「学びの一覧表」を参考にしたことで，学問系統を踏まえた 3 歳から 11 歳までに発揮，伸長させたい固有的資質・能力の設定を行うことができた。こうして設定した固有的資質・能力は 32 あり，その新たなまとまりは 12 となった。 **3. 「実践データ」によるカリキュラム・マネジメントの継続，工夫** 幼稚園において，子どもの学びによるカリキュラム・マネジメントを継続して行った。子どもの学びと教育課程や長期指導計画のねらいとの間にズレがないか意識するための手順を開発し，実践した。 **4. 幼稚園教育課程における観点の見直し** 幼稚園教育課程「10 視点カリキュラム」を資質・能力のフィルターを通して見直した。その結果，見出した初等教育要領の資質・能力の観点と本園教育課程の観点を共通にすることが資質・能力の発揮，伸長を支えていくために望ましいと考え，本園教育課程の観点を見直した。初等教育要領の資質・能力の観点と幼稚園の教育課程の観点を共通にすることで，子どもの育ちの見取りがより分析的になり，資質・能力の発揮，伸長を支えることに資する教育課程に改善した。 **5. 遊びや生活のまとまりとしての計画の見直し** 幼稚園において，協同的な学びを保障すべく，友達と共通の目的に向かって挑戦を繰り返したり友達と創り上げたりする遊びや生活のまとまりとしての計画を，初等教育要領を反映させ，且つ実践に基づいて改善を行なった。 **6. 資質・能力が発揮，伸長される学びの場づくり** 小学校においては，資質・能力が発揮，伸長される学びの場づくりについて研究を進めた。教師がどういった学習の場を構成し，支援を行うことで子ども達の資質・能力はより発揮，伸長されるのか，具体的な実践を通して検討を行った。その際，「他者との対話」「対象との対話」「自己との対話」の三つの対話の場に着目することで，各場における教師の具体的な支援を検討することができた。 **7. 新設教科「グローバル科」（9～11 歳）の内容や 6～8 歳までのカリキュラムとのつながり，効果検証のあり方についての明確化** 9～11歳（後期）カリキュラムにおいては，新設教科「グローバル科」を設定した。新学習指導要領における外国語活動と「グローバル科」との関係性，また，6～8歳（初期，中期）における「せかい領域」を中心とした学習内容と「グローバル科」の学習内容の系統性について検討を行なった。また，連携研究委員の先生とも共同し，「グローバル科」としてのカリキュラム体系に基づいた各年齢における学習の単元化にも取り組んでいる。
第二年次	第 2 年次は，以下の体制で研究に取り組んだ。（平成 31 年 2 月 12 日時点） ○　運営指導委員会：第 1 回を 6 月 13 日に，第 2 回を 1 月 31 日に実施 ○　拡大研究会 ・保育実践の振り返りを通して，子どもの発達過程の理解深化 ・新設教科「グローバル科」の内容，系統性の明確化をはじめ，各教科の実践化に向けた教科部会のグループを組織 ○　幼小研究会：幼稚園及び小学校教員で構成し，以下のように組織 ・初等教育研究委員会：管理職及び研究担当教員で構成し，研究の方針決定やまとめを行う（8 回開催） ・初等教育研究会：全教員で構成し，研究の共通理解を図る（7 回開催） ・小学校部会：資質・能力が発揮，伸長される学びの場づくりの推進（39 回開催） ・幼稚園部会：資質・能力の発揮，伸長を支える保育実践の検討および実践事例の検討，カリキュラム・マネジメントの推進（33 回開催） ・5，6 歳部会：資質・能力カリキュラムの実践を通した相互理解（14 回開催） これらの研究会を通して，以下の研究を進めた。 **1. 初等教育要領の充実** 「9 年間を見通しためざす姿」や実践記録を基に，54 の資質・能力全てに定義を置くことができた。また，幼稚園教育要領は満 3 歳児からを対象としていることから，初等教育要領においても，満 3 歳児について明らかにし，初等教育要領のさらなる充実を図った。また，小学校ではめざす姿の一部を書き換えたり，固有的資質・能力のめざす姿の空白部分を埋めたりすることができた。 **2. 「実践データ」の集積** これまでに設定してきた資質・能力と，各年齢におけるめざす姿の検証を行うことを目的と

	して，子どもの学びの姿を集積した。幼稚園ではこれまでの資質・能力を伸長する姿に有効であった手立てに加え，資質・能力を発揮する姿に有効であった手立てについても，より丁寧に考察を行なった。 **3. 初等初期，中期，後期と置いてきた発達の節目についての再検討** 29 年度末から行っている「発達の節目」の再検討の結果，「無自覚的な学び」から「自覚的な学び」の移行期が 7 歳前半ではなく，7 歳の間にあることが見えてきた。 **4. 資質・能力が伸長されるカリキュラムの充実** 幼稚園では，教育課程を「資質・能力カリキュラム」に完全移行した。カリキュラムや実践を，資質・能力の発揮，伸長という観点で捉え直すことで，カリキュラムの充実が進んだ。また，「遊びや生活のまとまりとしての計画」の改善に取り組み，保育における位置付けを明確にした。 小学校では，資質・能力が発達段階に応じてより発揮，伸長される学習単元をカリキュラムとして蓄積することで，教育課程の充実を目指した。これまで作成してきた「年間学習計画」，「単元ごとの評価規準表」の他に，授業者一人一人がどの単元でどの資質・能力を発揮，伸長させるのか記録することができる「資質・能力発揮，伸長表」，「単元構成表」の 4 点をカリキュラムとした。実践後には振り返り，修正を加えたものを記録として集積した。 **5. 資質・能力を発揮，伸長させるための学習の場の構築とその効果の検証** 29年度の課題を基に，30年度春から「みわたす」を「ふかめる」に変え，単元を新たに四つの学習過程で構想することを共有した。また，教科部会ごとに，教科で大切にしたい学びを基にして，三つの対話，それらに向けた支援を設定した。「他者との対話」「自己との対話」に向けた支援については，通教科的な支援であり，教科の枠を超えて他の教科にでも適用させていくべきものであることを小学校教員で共通理解した。
第三年次	第 3 年次は，以下の体制で研究に取り組んだ。（令和元年 12 月 3 日時点） ○　運営指導委員会：第 1 回を 6 月 15 日に，第 2 回を 11 月 29 日に実施 ○　拡大研究会 ・保育実践の振り返りを通して，子どもの発達過程の理解深化 ・新設教科「グローバル科」の内容，系統性の明確化をはじめ，各教科の実践化に向けた教科部会のグループを組織 ○　幼小研究会：幼稚園及び小学校教員で構成し，以下のように組織 ・初等教育研究委員会：管理職及び研究担当教員で構成し，研究の方針決定やまとめを行う（13 回開催） ・初等教育研究会：全教員で構成し，研究の共通理解を図る（7 回開催） ・小学校部会：資質・能力が発揮，伸長される学びの場づくりの推進（44 回開催） ・幼稚園部会：資質・能力の発揮，伸長を支える保育実践の検討および実践事例の検討，カリキュラム・マネジメントの推進（22 回開催） ・5，6 歳部会：資質・能力カリキュラムの実践を通した相互理解（8 回開催） これらの研究会を通して，以下の研究を進めた。 **1. 初等教育要領の充実** 54 の資質・能力の定義，「9 年間を見通しためざす姿」，実践記録を基に，社会的資質・能力，固有的資質・能力，汎用的資質・能力の 3 つの大きなまとまりについて整理し，定義を置くことができた。第 2 年次に設定した満 3 歳児のめざす姿について，入園直後の 1～3 月生まれの 3 歳児学級の子どもの姿や保護者アンケートから検証を行った。 **2. 「実践データ」の集積** これまでに設定してきた資質・能力と，各年齢におけるめざす姿の検証を行うことを目的として，子どもの学びの姿を集積した。幼稚園では，資質・能力の発揮，伸長に向けて有効であった手立ての集積を，実践記録の作成，検討により引き続き行った。さらに，より多くの手立てを集積すべく，研究保育の機会を活用した集積にも新たに取り組んだ。 **3. 「発達の節目」である 7 歳のカリキュラムについての検討，実践** 「発達の節目」である 7 歳の 1 年間で，「資質・能力カリキュラム」と「教科等カリキュラム」をつなぐ方法を見出し，実践を進めた。7 歳前半の「資質・能力カリキュラム」は，これまで検討，検証を進めてきた 6 歳のカリキュラムを基につくり上げた。7 歳後半の「教科等カリキュラム」は，教科，領域というそれぞれの学問体系で学習を組むが，子ども達の必要感に根差した単元を構成したり，教科の観点で評価，評定を行いながら 54 の資質・能力も形成的評価の視点として用い，担任が子どもの学びを見取り，支援したりするようにした。 **4. 6 歳，7 歳前半の「資質・能力カリキュラム」の評価方法の開発** 「評価補助簿」を使い，資質・能力の観点で子ども達の姿を評価し，記録・集積した。その記録を基に，カリキュラム改善に取り組んだ。 **5. 資質・能力が発揮，伸長されるカリキュラムの充実** 幼稚園では，「資質・能力カリキュラム」による実践を通して，汎用的資質・能力の問題解決力をねらいに挙げることで思考の過程を意識した指導方法になる等，指導方法の充実に向け

	て継続して取り組んだ。また，その実践を受けて記録した子どもの資質・能力の発揮，伸長する姿を用いて，教育課程や長期指導計画等カリキュラムの見直しを行い，充実させる取組も継続した。小学校では，資質・能力が発達段階に応じてより発揮，伸長される単元を蓄積することで，カリキュラムの充実を目指した。6 歳，7 歳前半は，「年間学習計画」「単元ごとの評価規準表」「単元構成表」「評価補助簿」の 4 点をカリキュラムとした。また，7 歳後半～11 歳は，「年間学習計画」「単元ごとの評価規準表」「単元構成表」と授業者一人一人がどの単元でどの資質・能力を発揮，伸長させるのか記録することができる「資質・能力発揮，伸長表」の 4 点をカリキュラムとした。実践後には振り返り，修正を加えたものを記録として集積した。

（３）評価に関する取組

	評価方法等
第一年次	**1　平成 29 年度「第 1 回運営指導委員会」を開催し，「初等教育要領」の充実に向けて，指導・助言を受けた。（平成 29 年 6 月 22 日）** **指導・助言をいただいたことは，以下の通りである。** ・本校で開発している「初等教育要領」と，新しい学習指導要領および幼稚園教育要領との関連を明確にしておく必要がある。 ・幼稚園教育においては，子ども達が好きに遊んでいるように見えて，実は先生が一つひとつを見取っている。小学校教育においても，姿をベースにしたカリキュラムを取り入れていくことが大切である。 ・社会的資質・能力，汎用的資質・能力，固有的資質・能力は別々に育てられていくわけではなく，一体として育まれていく。汎用的資質・能力においても，汎用的資質・能力のみを個別に育むものではない。様々な資質・能力を一体として育もうとしている本校園のカリキュラムに価値がある。 **2　評価調査を行った（平成 29 年 7 月）** 子どもの非認知能力の客観的な評価調査（「学習コンピテンス」，「社会コンピテンス」，「運動コンピテンス」，「自己評価」，「共感的関心」，「気持ちの想像」，「知的好奇心」，「因果律」，「達成」，「帰属」，「挑戦」）と，「SDQ テスト」による評価調査を実施した。対象は 6 歳から 11 歳までの児童。 **3　平成 29 年度「第 2 回運営指導委員会」を開催し，「初等教育要領」の充実に向けて，指導・助言を受けた（平成 30 年 1 月 31 日）** ・本校園の展開の書き方は新要領の展開のモデルとなり得る。それを意識して発信してくとよい。 ・資質・能力の育成を意識した実践を生み出し，検討していくことが大切である。保育・授業検討においても，それを最大の観点にもって検討をする必要がある。 ・教材研究においては，教科書に書いてあるから妥当であると考えるのではなく，現在の教科書の一歩先をいく取組をしていることを念頭において検討することが大切である。 ・設定した資質・能力について，今後も子どもの具体的な姿を通して整理をしたり確認をしたりして，エビデンスを示していくことが必要である。 ・幼稚園教育要領は，学びのプロセスが書かれている。資質・能力も学びのプロセスに表れるものである。小学校においても，単元における学びのプロセスを評価し，それを基にカリキュラムや資質・能力の設定を改善していく必要がある。
第二年次	**1　平成 30 年度「第 1 回運営指導委員会」を開催し，「初等教育要領」の充実に向けて，指導・助言を受けた。（平成 30 年 6 月 13 日）** **指導・助言をいただいたことは，以下の通りである。** ・1 年生は，資質・能力の発揮，伸長に重きをおいたカリキュラムであるため，学習内容はどうなっているのか，教材，学習材について考えていく必要がある。 ・どのような教材，遊びをどのような観点で選ぶのかをもつ必要がある。（例えば，教材の特徴，構造，編成，季節性，伝統など） ・思考方略がないと遊び，学びが成立しないが，その思考方略が汎用的な資質・能力であれば，汎用的資質・能力だけ質が違う。3 つの資質・能力の関連性を整理する必要がある。 **2　評価調査を行った（平成 30 年 7 月）** 子どもの非認知能力の客観的な評価調査（「学習コンピテンス」，「社会コンピテンス」，「運動コンピテンス」，「自己評価」，「共感的関心」，「気持ちの想像」，「知的好奇心」，「因果律」，「達成」，「帰属」，「挑戦」）と，「SDQ テスト」による評価調査を実施した。対象は 6 歳から 11 歳までの児童。 **3　平成 30 年度「第 2 回運営指導委員会」を開催し，「初等教育要領」の充実に向けて，指導・助言を受けた（平成 31 年 1 月 31 日）** ・資質・能力を強く意識したとき，単元展開，本時，目標，評価がどう変わるのかを明確にしなければならない。

	・社会，固有，汎用的資質・能力，個別で見たとき，また，相互関連の視点で見たとき，子ども達がどのように変わっていくのかを検証する必要がある。 ・7 歳の中で「資質・能力カリキュラム」と「教科等カリキュラム」をどのようにつなぐのかが問題である。 ・計画で資質・能力の意図は必要であると考えられる。しかし，実践から見られる想定外のものもあるのではないか。それを踏まえて更新，改善を図ると良いのではないか。 ・固有的資質・能力と知識内容の体系性との関連を明確にする必要がある。
第三年次	**1　平成 31 年度「第 1 回運営指導委員会」を開催し，「初等教育要領」の充実に向けて，指導・助言を受けた。（令和元年 6 月 15 日）** **指導・助言をいただいたことは，以下の通りである。** ・54 の資質・能力という子どもの姿を捉えるための細かな枠組みが共有されたことで，教員の使っている言葉が共通の言葉になり，指導や評価がより適切なものになってきている。 ・資質・能力は設定するだけでは意味がなく，活かすために教員の資質・能力が必要となる。素材を教材にしていく，新しい教材を開発していく。そのとき，丁寧に教材研究に取り組むために，教科の専門性が必要である。 ・資質・能力，めざす姿，発達の節目について，実践を通して，絶えず見直していくことができる学校園の体制づくりが大切である。 **2　評価調査を行った。（令和元年 7 月）** 子どもの非認知能力の客観的な評価調査（「学習コンピテンス」，「社会コンピテンス」，「運動コンピテンス」，「自己評価」，「共感的関心」，「気持ちの想像」，「知的好奇心」，「因果律」，「達成」，「帰属」，「挑戦」）と，「SDQ テスト」による評価調査を実施した。対象は 6 歳から 11 歳までの児童。 **3　平成 31 年度「第 2 回運営指導委員会」を開催し，本取組及び今後に向けて，指導・助言を受けた（令和元年 11 月 29 日）** ・教科の学びを幼児教育の中の「感じたり，気付いたり」といった学ぶプロセスに落とし込み捉え直すことで，幼児教育の中に教科の学びの基盤を見出すことができるのでないか。また小学校の指導方法に生かすことができるのではないか。 ・ドキュメンテーションについては，子どもの行動の中の思いがけないところを捉えて発信することを大事にしたい。 ・子ども達が何をしてきているのかという経験を診断し，保障する必要がある。経験とは教材に直結する経験だけではなく，日常生活に関する経験も含めて考える必要がある。 ・非認知能力と資質・能力がどのようにつながっているのか，また，非認知能力の評価調査をどのように学習に生かすのかという提案がほしい。

５　研究開発の成果

（１）実施による効果

１）子どもへの効果

これまでの研究開発 6 年間に引き続いて，本研究開発において構築・試行した教育課程が，児童の非認知的側面―有能さに関する自信・他者への思いやり・学びの基盤となる学習意欲―に与える影響を客観的に実証するための方策として，心理尺度―コンピテンス・共感性・学習動機―を利用した調査を実施した。有能感については「学習コンピテンス」,「社会コンピテンス」,「運動コンピテンス」,「自己評価（全般的コンピテンス）」を，共感性に関しては「共感的関心」,「気持ちの想像」を，学習動機に関しては「知的好奇心」,「因果律」,「達成」,「帰属」,「挑戦」といった下位尺度に分かれている質問紙に，6 歳（小学第 1 学年）から 11 歳（小学第 6 学年）までの全児童が回答した。今年度もこれまでと同じ時期（2019 年 7 月）に実施した。

２）教師への効果

①子ども理解の深化

・実践記録を作成し，子どもへの声かけや行動を可視化することで，それぞれに意味付けができ，確かに子どもの学びにつながる援助であったことを確認できる機会にもなった。また一方で，今まで自然に出ていた自身の言葉や行動の中でねらいが曖昧な援助があったことに気付かされることもあった。その際には，子どものどの資質・能力を支えていきたいのかを明確にし，教師が深く意識して実践することで子ども達の姿も遊びや学びの質も変わっていくということを実感できた。

・実践記録の作成，検討を通して，子どもの遊びの場や遊びを一つとして捉えず，子どもの行動と言葉，周りの刺激を一つ一つ噛み砕いてみていくことで，その遊びの価値や子どもの心の変化，資質・能力の理解が深まり，それによって子どもが夢中になっている遊びを多面的に見ることができてきた。また，事実を基に子どもの思いや資質・能力の発揮，伸長している姿を読み解いていく面白さ，実践して省察することの大切さを感じている。

・子どもが様々な資質・能力を発揮しながら，友達からの刺激や教師の環境の構成，援助によって新たに資質・能力を伸長させる過程を可視化した実践記録を職員同士で詳細に検討していくことで，実践者以外にもその時の子どもの姿がよく伝わり，その年齢のその時期の発達の様相を掴むことができている。

・これまで行ってきた事実と解釈に分けて見取る作業をしたことで，子ども達の発言や行動を教師の勝手な解釈ではなくみとることができるようになり，この見取りや支援を繰り返し行うことで，解釈の幅が広がり，子ども達の姿をより明確な根拠をもって見取ることができるようになっている。またその根拠がどの資質・能力に位置づ

くのかなどを考えることで，支援の方法を多面的に考え，子ども達に声をかけられるようになっている。子ども達の資質・能力の発揮，伸長は学習だけにとどまらず，すべての場面で見ることができ，さらに支援の方法は１つだけではなく，その状況・場面によって，教師は子ども達の状況を見ながら，支援を打つことができるようになっていると感じる。

・初等前期（７歳）の単元を作る中で，幼児期に育んできた資質・能力を意識するようになった。自分が支援する対象となる子どもが，「一般的な２年生」とするのではなく，今までにこんな体験，こんな学習を体験し，このような資質・能力を発揮，伸長してきた子どもとなったことが大きい。以前よりも，幼い子どもと見る面が少なくなり，体験や学びを積み重ねてきた学習者とみることができるようになった。

・高学年においても資質・能力の視点で子ども達の姿を意識して見取り，それらを発揮，伸長するための支援を考え，子どもの育ちに関わることができたことは成果であると考える。しかもそれは，学習中のみならず，学校生活全般において意識できたことが大きいと感じている。

・子どもへの見取りについて，資質・能力を発揮伸長する姿をどのタイミングで，どの行動で，どの表情で，どの言動でという見方で見ようとすることを意識できるようになった。幼稚園の参観をして，一つひとつの事実の裏にどのような子どもの思考が働いているのかを特に考えることができた。「遊び」を通して，子どもが何を考えて次に何をしようとしているか，その行動を行った理由にも考えを及ぼすことができた。幼稚園や低学年の参観で，事実と解釈に分けて，子どもの学びを見取るということは，大変分かりやすく，自分の学年にもその見取りを意識して行うようになった。

②幼小接続について（資質・能力カリキュラムも含む）

・資質・能力の観点を用いて保育を行い，振り返り，実践記録を作成，検討するなどすることで，子どもの学びや教師の援助について学べるだけでなく，資質・能力そのものについて考えるため，資質・能力への理解も深まっている。

・幼小で共に一年生の単元を検討する時間をもつことができた。幼小が実際の単元づくりを共に行うことにより，お互いが大切だと考えていることや子どもの学びの捉えを具体的に知ることができた。

・7 年間にわたり，幼稚園とともに研究開発に取り組んできた。教育課程を含め，小学校の学習を構想することに幼稚園の教員とともに考えることが日常的なことになり，幼稚園・小学校の一体的な教育が進んでいったものと考える。幼稚園と小学校とが，初等教育を推進する場にあるということが普段に考えられる場を構成できたことは，今回の研究が研究にとどまらず学校園の運営にも作用していたと考える。

・幼稚園の保育参観に出向くことで，小学校低学年の学習とのつながりなどがより見やすくなった。環境構成や声かけなどには双方ならではの意図があり，その意図を知ることで幼稚園と小学校の接続がより明確な視点で見ることができるようになった。

・見取りについての取り組みは，教員が個々に事実を解釈するものではなく，幾度も検討を重ねながら同じものさしを基に見取っていこうとする取り組みであり，教員の見取りの質的向上については，検討，共有する場を設定することで十分に担保することができていると考える。また，これらのものさしを幼小一体として共有・検討し，実践を重ねていくからこそ，幼稚園と小学校の円滑な接続に大きくつながっていると考える。

・今回の研究発表会では，前期部会での提案の場が設けられていた。そのため，幼稚園の先生とカリキュラムや研究について意見を交わす機会を多く設けることができた。資質・能力のめざす姿だけではなく，具体的に幼稚園の実践と小学校の資質・能力カリキュラムをいかに繋げていくべきかということをともに考えるよい機会であった。

・前期部会では，資質・能力で学習のねらいを設定し，評価を行った。この取組を行うことで，学習を構想していく段階から，子どもの姿を細かく想定することができた。学習を進めていく上では，教科に密に関わる固有的資質・能力だけではなく，他の固有的資質・能力の発揮，伸長を意図的にねらい，見取っていくようになった。つまり，国語だから文字を書く，算数だから数をまとまりで捉える，という固定概念を取り払い，教科横断的に資質・能力を発揮，伸長できるよう支援し，見取っていくことができるようになった。

・幼小で同じ資質能力をもとに見取ることで，目線をそろえて子ども達を見取ることができたと思う。また，５・６歳の交流では，幼稚園で行われている資質・能力を発揮，伸長するためにきめ細かな支援の仕方や環境設定を知ることができ，1 年生を担任したときにはとても参考になった。

・共通の資質・能力をいう視点を持ち，幼稚園の保育や各学年の学習を参観する機会を持つことができたことで，幼時期からの９年間の子どもの育ちを意識しつつ，現時点での子ども達への支援を考えることができたことは大きな効果である。

・2 年生後期以降は「教科等カリキュラム」で取り組んでいるが，54 の資質・能力を形成的評価のための視点として使っている。これは，ある教科内容や付けたい資質・能力以外の資質・能力を見取り，支援し，発揮，伸長させる機会が学習時間内にはたくさんあるからであり，教科指導だけではなく，同時に生活指導，子ども達の社会性を育むなど様々な力をつけていくことが大切であると考えているからである。これは現在カリキュラム・マネジメントと言われている部分に直結する点である。計画的に資質・能力を発揮，伸長させることが子ども達をよりよく伸ばすことになることが理解できた。

③指導方法の改善と実践意欲の高まり（評価補助簿を含む）

・実践記録の検討を通して，自分自身の援助について考える機会になると同時に，よりよい援助について検討していく中で，新たな資質・能力の視点からの援助について学んだり，深めたりしていくことができた。また，実践者の行った援助が，自分の援助の引き出しを増やすことにつながっていると感じる。

・実践記録「お腹の中に赤ちゃんがいるって不思議だなぁ」の検討をする中で，子どもの発言や姿の中に含まれる学びを他教師と検討することで，その時に気付けなかった要素（母音の韻を踏むことに関して）に気付き，その時に気付いていればできた援助を考えることができた。同じ場面でその反省を生かしていくことができる。

・子どもの資質・能力の発揮，伸長に向けて有効な環境の構成や教師の援助をより多く集積し，月の指導計画へ反映，充実させるために，実践記録の【Ⅱ】表に集積される資質・能力の発揮を支えた環境の構成や教師の援助を，主に検討時に探ることが多かったのを記録作成時にもより意識的に探るようにした。そのことで，自身の環境の構成や教師の援助一つ一つをより丁寧に振り返ることができ，意図したこととは異なる効果等の気付きからより

多様な意図をもったかかわりへつなげることができた。さらに，同様の目的のために，研究保育時に子どもの資質・能力の発揮，伸長に向けて有効な環境の構成や教師の援助を集積した。そのことで，子どもの資質・能力の発揮，伸長の要因を探りながら観察することができ，事後の協議では，子どもの事実から資質・能力の発揮，伸長に有効であった環境の構成や教師の援助が検討，共有され，そのタイミングや言葉の内容，言い方等，詳細な振り返りができ，資質・能力の発揮，伸長に有効な指導方法が明らかになることにつながった。

・学年が異なる事例であっても，同じ遊びをしていることも多々あり，その遊びならではの学びを考える機会になると同時に，そのための教師の援助や環境の構成を考える機会となっている。
・他教師の実践を見ることで，同じ場面を見ての話し合いができ，教師の援助や環境構成の工夫や，それが子どもの主体的な活動につながっていることを学ぶ機会となった。また，自分の保育に取り入れられるところを考え，試してみたり，それにより反省したことを改善したりと，より自分の保育を立ち返り充実することができた。
・評価補助簿の開発を行ったことにより，子ども達の資質・能力が発揮，伸長されたタイミングで教師が記録していくことが可能になった。また，記録したことが自動的に一人ひとりの個票として集積されるようになったため，どの子どもが一年間でどのような資質・能力を発揮，伸長してきたのかを見取ることができるようになった。
・評価補助簿を使用することによって，事前に発揮，伸長をねらう資質・能力のめざす姿を設定し，その視点で確実に見取ろうという意識をもつことができる。指導と評価の一体化といわれるように，評価を指導に活かしていかなければならないが，何を見取り，何を活かすのか明確になっていないまま学習をスタートしても結果的には成果物やノートの記述のみの評価になることが多いといえよう。そのため，今回のように，補助簿で評価し，その評価をもとに次の支援を考えることができやすくなった。
・今年度 ICT 機器を活用した評価補助簿を開発することで，子どもの学びを見取り，それを評価し，学びへフィードバックしていく一連のプロセスがより円滑となった。同時に個々の見取りを丁寧に行うという，当たり前のことだが非常に大切でかつ難しい視点をあらためて持てたことは収穫である。今後も一人一人の学びに寄り添う授業づくりを意識していきたい。
・ドキュメンテーションを作ることで，遊びの過程や子供が楽しんだり学んだりしているところを再確認し，より遊びを面白くするためや子供同士をつなげるために必要な環境構成や言葉がけなどの今足りていない援助や，遊びに必要なものを自分で気付いて選んだり工夫したりすることなどの自分で学ばせたり感じさせたりしたいことが，自分の中で明らかになってきた。
・丸く作った粘土をお父さんやお母さん，子どもに見立てた友達の言葉を聞いて，「面白～い。」と言った子どもの事実から，その子どもの学びを，見立てた友達の考えを面白いと思う「他者のことを知る」資質・能力の伸長であると解釈し，その方向の育ちに向けて援助していた。しかし，実践記録の検討において，子どもの学びは，見立てた友達の作品そのものの表現を面白いと思う「造形に表す」資質・能力の伸長であると解釈し直すことで，その方向の育ちに向けて援助すべきであったと気付いた。一つ一つの子どもの事実を資質・能力の詳細な観点で丁寧に解釈すること，職員同士で子どもに対する捉えを出し合うことで，子どもにとってよりよい援助にしていくことができていると実感している。
・フライパン作りの実践事例を検討していく中で，教師は子どもの言葉を言い換えたりつなげたりすることを考えていたが，その子ども達の姿を見取ると，子ども達同士で考えを出し合ったり，決めていったりできることに気付き，見守ることや子ども同士でやりとりできるような言葉かけをすることに気付いた。それをすぐ反省として，次の日に活かしていくことができた。
・本年度も社会的資質・能力の実践記録の集約をし，検討会を行うこととともに，幼小で社会的資質・能力のめざす姿の検討を行うことで，一つ一つの社会的資質・能力に対する理解を深めたり，同人で共有したりすることができたことによって，より学校として幼稚園と同じ目線で子どもをはぐくむことに一歩近づいたように感じた。単元を構想する上で，資質・能力の発揮，伸長を意識し，指導方法を考えることができた。特に，社会的資質・能力に関しては，本研究を進めていなければ教科の学習ではなかなか意識しなかった点である。そして，社会的資質・能力を意識し，教科の指導方法を考えることにより教科内容だけではない視点を取り入れることができ，指導に幅を持たせることができた。例えば他者を称賛する資質・能力の発揮をねらった学習において，「〇〇くんの図がわかりやすかった。」というように，他者の考えの素晴らしさを意識して聞き気付くようにするとともに，算数の図形の見方を新しい視点で捉えて見方を深めることができた。また，具体的な姿を設定することで，それらが，発達段階に応じているのか（適切であるか），我々の見取りにずれがあるのか，分別して見取ることが難しいものであるのかなどを考える良い機会であった。今後より資質・能力を伸長させる支援を考えていきたい。
・学期末にカリキュラムの検討をし，教育課程のどの部分の事実が足りていないか確認しておくことで，次年度の始めから意識して取り組むことができた。ドキュメンテーションや実践記録作成時に，教育課程の検討部分に当たる事実がないかを検討し，記録に残していこうとする意識が高まった。

３）保護者等への効果

本教育課程についての保護者説明会を実施した際，次のような感想・意見が寄せられた。この結果，保護者から一定以上の関心，理解及び期待を得ており，本研究開発の推進に資する協力が望めると考えている。今後，全体の感想・意見を集約した上で，教師全員での共有を図るとともに，保護者からより一層の理解・協力が得られるように活かしていく。

・2 年生（7 歳途中）での自発的な学びが大事であり，前期と後期を分ける点が興味深く，研究に基づいた学び方を，幼小を通じて実践できることで子どものもっている可能性をさらに広げられると思います。
・幼稚園での生活は「無自覚的な学び」の積み重ねだったので，それを踏まえた上での小学校カリキュラムを組んで下さっていることはとても素晴らしいと感じます。
・幼小 9 年間の学びで，幼稚園からの学びの連続やその延長に，教科をさらに深い学びへとつなげること，さらにはそれが「自己評価の高さ」や成長に繋がるのだということが分かりました。
・１つの学年の中でカリキュラムを変えていくことにより，単元と教科のつながりをもたせる事は，とても良いことだと思います。また，自分と他者との納得解を考える事は，自分自身と向き合うだけでなく，他者理解も同時

に深められる人に育っていくと思います。
・資質・能力を定義づけることで，支援する必要性が明確化され，すべての先生方に意識的に支援していただける仕組みがつくられる事について，一般的には，先生方のそれまでの経験によって指導されることが多いように思うので，是非，公立小学校等へと取り組みを広げていっていただきたいです。
・2 年生から 3 年生への育ちの伸びは大きいように感じます。発達の節目が 7 歳の中にあるのではないかと言われていたことに，大変興味をもっています。幼稚園での学びが基になり，小学校の学習へつながったり，小学校の学びを基により深められていく学びがあったりするこの 9 年の育ちは，大切だと感じています。
・今年度も引き続き 54 の資質・能力を軸にした，様々な授業や学習がその能力を発揮，伸長されるために，重要な役割を担っているのだと感じました。単元という見通しをもって学習をする事が，学習の主体者として学んで行くことに必要であると感じました。
・昨年度，我が子が 2 年生の 1 年間の中で大きく成長するのを実感しました。そこに境目があるというのは納得できました。
・幼稚園から小学校での学びの連続性・一貫性を可視化するという内容，理解致しました。子ども達それぞれの資質・能力が発揮，伸長される環境づくり，体制を行っていただいているということで，家庭としても同じ方向を向いて意識して関わっていきたいと思います。
・発達の節目の年齢に無自覚的な学びから自覚的な学びになるということで，細かく単元を組み替えられることが成果につながると良いと思いました。
・資質・能力の観点を教員がもつことで，その時に適切な支援をすることができるというお話を聞いて，親としてもその時々の発達段階に応じた適切な支援を考える必要があると思いました。
・日本の教育の向上に少しでもお役に立てているのではと，この学校の存在意義を強く感じます。実際に昨年度の 2 年生の子の親として，前期と後期でのふりかえりカードの書き方の成長には驚かされました。子どもは自然のままで，保護者が研究に対する意識を少し強くもつことで，子どものよりよい成長に繋がるのではと思います。

（２）実施上の問題点と今後の課題

１）幼稚園

幼稚園では，引き続きフォーマットを工夫しつつ，実践記録やドキュメンテーションを作成，検討し，データの継続的な収集を行う。そして，そのデータを用いて初等教育要領や教育課程，月の指導計画，遊びや生活のまとまりとしての計画を充実する取組を継続して行う。また，研究保育時の観察，記録により集積している資質・能力の発揮，伸長を支える手立てを整理し，月の指導計画へ反映し，実践の充実に向けて取り組んでいく。さらに，幼児教育における指導方法の中で，小学校の低学年教育においても生かすべき指導方法を明確にすることを目指す。

根拠となるデータの質を高めてきたが，データの量という観点からは圧倒的に不足している。現在は，「幼児教育の性質上，数値化された客観的な評価が行えるわけではない」という現実があるが，めざましい ICT 技術の進歩があり，今後，ICT 技術を用いた取組により，量的にも信頼に足るデータの集積が可能になることが予想される。その先進的な方法を神戸大学と共に行っていく必要がある。

２）小学校

本研究を継続することが，さらなる成果を生むと考えている。もちろん，この 7 年間の研究が成果のみを生んできたわけではない。今後の本校の在り方を考えていく上で，下記の課題について改善する必要があると考える。

① 54 の資質・能力で子ども達を見取り，支援するために，個々の教員の子どもを見る目，関わり方に関わる資質の向上を目指す必要がある。小学校教員の多くは，まだ 54 の資質・能力を使いこなすというレベルまで至っていない。幼稚園教員からさらに学んでいきたい。

② 資質・能力がよりよく発揮，伸長される単元づくりに取り組み，①年間学習計画，②単元ごとの評価規準表，③資質・能力発揮，伸長表，④単元構成表を作成してきた。これらは，教科，領域の学習を行う上で，54 の資質・能力の発揮，伸長をねらい，支援し，そしてまた，子ども達の姿を見取り，支援するというように絶えず繰り返すため作成している。今後も，これら 4 点の実践，修正を繰り返し，資質・能力がより発揮，伸長される単元を創り続けていくことが大切である。また，6 歳，7 歳前半に関しては，「評価補助簿」を使っての資質・能力を発揮，伸長した姿を見取り，「評価補助簿」の蓄積，改善も合わせて行う必要がある。

③ 6 歳，7 歳前半の「資質・能力カリキュラム」での授業を多くの教員が経験する必要がある。平成 31 年度を含め，本校で 6 歳，7 歳の担任をした教員は半数にも満たない。日々の取組や研究実践での公開による共有は行っているが，担任をすることで初めて実感し，理解できることも多くあると考えるからである。また，これは，「教科等カリキュラム」の単元をつくる際，教科の視点を大切にすると同時に 54 の資質・能力を強く意識できるはずだと考える。

④ 「グローバル英語教育」の理念を共有し，単元開発を進めてきた。今後はさらに実践を積み重ねると同時に，文部科学省から提案される「外国科」，「外国語活動」の動向を十分に把握した上で，「グローバル英語教育」の方向性を見定めていく必要がある。

⑤ 幼稚園教育と小学校教育の接続期と考える 5 歳から 7 歳を，新たな低学年教育として形作るために，「自発的な活動としての遊びを大事にした保育」から「子ども達の生活や必要感に根差した単元」，そして，教科へ移行する時期をさらに探る必要がある。本校園では，7 歳半ばで「教科等カリキュラム」を始めているが，教科によって開始時期が異なるという可能性をも探っていきたい。

【別添１】－別紙１

研究の概要

神戸大学附属幼稚園　外１校

１　研究開発課題

幼稚園と小学校の円滑な接続に資する，子どもの学びに着目した，幼児教育と小学校教育 9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の充実

２　研究の概要

幼稚園と小学校の円滑な接続を図るため，子どもの学びの姿から 3 歳から 11 歳までの 9 年間における「発達の節目」を明らかにし，9 年間を見通した教育課程の大綱となる「初等教育要領」を充実する。

具体的には，以下の取組を実施する。

①9 年間を見通した年間学習計画等の見直しの継続

②保育・授業による実践データの収集及び検証

③資質・能力ごとに示しためざす子どもの姿の空欄部分を明確化

④資質・能力の重なりがないか改めて検討し，資質・能力それぞれの関係性を明確化

⑤幼児教育と小学校教育の 9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」の充実

⑥新設教科「グローバル科」（9～11 歳）の内容や 6～8 歳までのカリキュラムとのつながり，効果検証のあり方についての明確化

⑦「初等教育要領」の実践化，精緻化に向けた教師の学習の場の構築とその効果の検証

3　研究開発の手段

①保育・授業実践による実践データの収集及び検証

実践を通した子どもの事実を基に見直しをかけて作成した「初等教育要領」に基づく実践を行うことで実践データを収集するとともに，子どもの学びの実態に着目しながら，その妥当性を検証する。その際，常に子どもの事実にこだわり，子どもが何を学んだかを見取ることに主眼を置き，各教師個人による日々の省察，研究グループによる省察及び全体での省察を行う。

②教育課程の大綱「初等教育要領」の充実

実践による検討・修正を繰り返すことで，資質・能力のめざす姿の深化・充実を図り「初等教育要領」の完成度を高める。特に，各資質・能力が発揮，伸長される 9 年間のカリキュラムを作成する。

4　期待される具体的成果

本研究開発の指定延長によって，次のような成果が得られると考える。

④　本研究開発で開発した，9 年間を一体としてとらえた教育課程の大綱となる「初等教育要領」を充実することができ，資質・能力ごとに，幼稚園から小学校までの 9 年間の発達の過程に応じためざす子どもの姿を明らかにできる。

⑤　幼稚園と小学校の教師同士の連携や交流が促進され，幼小の 9 年間を一体としてとらえた上での，互いの教育内容及び指導方法等についての相互理解の深化や一貫性を持った教育実践が推進される。

⑥　「初等教育要領」に基づく実践を通して，幼稚園教育と小学校教育の円滑な接続が図られ，子どもの学びの連続性を保障することができる。

研究発表会等を通して，子どもの学びに着目することや 9 年間を一体としてとらえることの重要性，それらに基づくカリキュラムや実践について，地域の初等教育関係者との相互理解を促進するとともに，保護者の理解を深めるなど，より一層の連携・協力を推進することができる。

【別添１】－別紙２

神戸大学附属小学校　教育課程表（令和元年度）

	各教科の授業時数										道徳	外国語活動	総合的な学習の時間	せかい領域※	特別活動	資質・能力※	総授業時数
	国語	社会	算数	理科	生活	音楽	図画工作	家庭	体育	グローバル科							
第１学年	0 (−306)		0 (−136)		0 (−102)	0 (−68)	0 (−68)		0 (−102)		0 (−34)				0 (−34)	966 (+966)	966 (+116)
第２学年	157 (−158)		87 (−88)		53 (−52)	35 (−35)	35 (−35)		53 (−52)		18 (−17)			18 (+18)	66 (+31)	520 (+520)	1042 (+132)
第３学年	245	70	175	90		60	60		105	35 (+35)	35	0 (−15)	70		139 (+104)		1084 (+124)
第４学年	245	90	175	105		60	60		105	40 (+40)	35	0 (−15)	70		167 (+132)		1152 (+157)
第５学年	175	100	175	105		50	50	60	90	50 (+50)	35	0 (−50)	70		198 (+163)		1158 (+163)
第６学年	175	105	175	105		50	50	55	90	60 (+60)	35	0 (−50)	70		201 (+166)		1171 (+176)
計	997 (−464)	365	787 (−224)	405	53 (−154)	255 (−103)	255 (−103)	115	443 (−154)	150 (+150)	158 (−51)	0 (−130)	280	18 (+18)	780 (+456)	1477 (+1477)	6573 (+868)

【別添１】－別紙３

学校等の概要

１　学校名，校長名

学校名:①神戸大学附属幼稚園（コウベダイガクフゾクヨウチエン）　②神戸大学附属小学校（コウベダイガクフゾクショウガッコウ）

校長名:岡部（オカベ）　恭幸（ヤスユキ）　（①②兼務）

２　所在地，電話番号，ＦＡＸ番号

所在地:兵庫県明石市山下町３－４（①②共通）
電話番号:①０７８－９１１－８２８８　②０７８－９１２－１６４２
ＦＡＸ番号:①０７８－９１４－８１５３　②０７８－９１４－８１５０

３　学年・課程・学科別幼児・児童・生徒数，学級数

① 附属幼稚園

3歳児		4歳児		5歳児		計	
幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数	幼児数	学級数
39	2	40	2	39	2	118	6

② 附属小学校

第１学年		第２学年		第３学年		第４学年		第５学年		第６学年		計	
児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数	児童数	学級数
70	2	68	2	67	2	67	2	70	2	64	2	406	12

４　教職員数

① 附属幼稚園

園長	副園長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	1				6				
講師	ＡＬＴ	ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ	事務職員	司書	計				
7			1		16				

② 附属小学校

校長	副校長	教頭	主幹教諭	指導教諭	教諭	助教諭	養護教諭	養護助教諭	栄養教諭
1	1		1		16		1		1
講師	ＡＬＴ	ｽｸｰﾙｶｳﾝｾﾗｰ	事務職員	司書	計				
4	1	2	5		33				